

大阪駅周辺・中之島・御堂筋周辺地域都市再生緊急整備協議会会議

大阪駅周辺地域部会

第4回 うめきた2期区域まちづくり検討会 会議録

1. 日時：平成26年10月14日（月）15：30～17：30

2. 場所：大阪市役所 7階 第5委員会室

3. 出席者

〈委員〉

東京都市大学教授、横浜国立大学名誉教授（座長）

小林 重敬

建築家、東京大学名誉教授

安藤 忠雄

大阪府立大学大学院教授

増田 昇

ひょうご震災記念21世紀研究機構副理事長

室崎 益輝

大阪府立大学特別教授・大阪市立大学特任教授

橋爪 紳也

都市再生機構西日本支社長

伊藤 治

伊藤滋都市計画事務所 パートナー

長島 俊夫

大阪府住宅まちづくり部理事

井出 仁雄

大阪市都市計画局長

川田 均

〈アドバイザー〉

大阪大学名誉教授

宮原 秀夫

4. 議事次第

(1) 開会

(2) 議題

・まちづくりの方針について

(3) 閉会

5. 配付資料

・次第、名簿、配席図

・資料1 第5回大阪駅周辺地域部会での主な意見

・資料2 うめきた2期区域における「みどり」と中核機能のあり方

・参考資料1 うめきた2期区域まちづくり方針検討資料（第5回大阪駅周辺地域部会資料）

・参考資料2 なにわ筋線の概要

・参考資料3 関西のイノベーション拠点の分布と拠点毎の取組み

・参考資料4 関西圏の大学の分布状況

・参考資料5 関西におけるコンベンション・展示施設等の状況

・参考資料6 国家戦略特区プロジェクト提案 概要

- ・参考資料7 関西イノベーション国際戦略総合特区申請書 概要
- ・参考資料8 大阪駅周辺地域 都市再生安全確保計画

6. 議事概要

事務局： 本日の議題は、「まちづくりの方針について」でございます。

9月1日に開催いたしました「大阪駅周辺地域部会」でのご意見を踏まえまして、「みどり」と導入機能の必要性、戦略的位置付け、なにわ筋線がもたらす効果、防災機能について、ご議論いただきたいと考えております。なにとぞ、よろしくお願い申し上げます。

なお、先日の部会におきまして、一般社団法人 関西経済同友会の篠崎常任幹事より、「みどり」のあり方についてご説明がございましたが、部会長より検討会にご意見を出していただいとのご発言がございましたので、本検討会設置要綱の第3条第3項に基づきまして、本日の検討会に篠崎様にお越しいただいております。

それでは、以降の議事進行につきましては、小林座長にお願いしたいと思います。よろしくお願い致します。

小林座長： では、本日の議題について、事務局より説明をお願いします。

〈事務局より配付資料を説明〉

小林座長： ただ今、事務局からご説明いただきました通り、中心的なテーマは「みどり」と中核機能ですが、部会で意見が出ました「なにわ筋線」、さらに「防災」の4つに分けて、順に議論いただきたいと思います。中核機能と「みどり」については若干時間を取って進めたいと思います。

(1) 中核機能について

小林座長： まず、中核機能について、関西の持つポテンシャルや課題を踏まえて、資料2に提示されている、うめきたにおける3つの中核機能の必要性、戦略的な位置づけについて議論いただければと思います。

最初に、この分野から宮原先生にご出席いただいておりますので、ご意見をいただきたいと思います。

宮原氏： 中核機能と「みどり」は決して競合するものではないので、この両方をいかに上手く実現していくかというところが知恵の出どころだと思います。

これを骨子という立場に置いて、必要条件として考えますと、この3つで十分にその必要条件が表されていると思います。そして、十分条件を構成する要素としては、この必要条件を見た民間の開発事業者から良い案が出るだろうと思います。

そういう意味で、骨子というレベルでは、この中核機能3つで十分表されているの

ではないかと考えます。

小林座長： ありがとうございます。重要な視点をご指摘いただいたと思います。

要するに、あまり絞り込まないで、この3つの領域をしっかりと民間事業者に提示するという話と、この機能は「みどり」と競合するのではなく融合するものであり、いかに「みどり」を活かした中核機能にするかという話だと思えます。宮原先生のご意見はまさにその通りだと思います。ありがとうございます。

他にいかがでしょうか。

小林座長： 本日、東京を発つときに、私が理事長を務めている大手町の有楽町地区のエリアマネジメント協議会から、東京の駅前で MICE をするというメールが入ってきました。都市型 MICE というもので、これは造語ですが、巨大な MICE 機能を施設としてつくることが欧米で行われています。ただし、丸の内にはすぐ近くに国際フォーラムがあるので、丸の内における仲通りを中心としたまちづくりを活かして、国際フォーラムとまちづくりが一体となって、都市空間としてのエリア自体が MICE 機能を持つという考え方をしています。

それを実践することになり、今週の土曜日から、丸の内でも都市型 MICE を実践します。そこで今回は世界の法曹界から法律家 5,000 人が集まって、国際フォーラムで会議を行い、その方々が丸の内でのいろいろな施設を見て、東京、日本について認識していただくという、そういう MICE を行いたいと考えています。

考えてみますと、大阪にもう一つの「みどり」があるわけですから、どこかにフォーラム的なものがあると、そこで会議をして、大阪駅周辺にこれだけ豊かな、建物と一体となった「みどり」の拠点があるということで、こういう空間こそ、日本のある意味での都市型 MICE 機能と言えます。それが東京と並んで、あるいは東京以上の空間として大阪の魅力的な部分になります。

それを提示していくことも重要ではないかと思えます。ご指摘のように、「みどり」と機能は競合するものではなく、むしろ積極的に互いに補い合って新しい魅力を大阪都心に創り出すものです。それによって都市型 MICE を展開するわけです。したがって、MICE 機能が一つの重要な機能になるという、そういう議論に結び付けられないかとメールを見て思った次第です。

長島委員： 宮原先生と小林座長のご意見には、基本的に賛成ですが、併せて、本日の資料にある国家戦略特区や関西イノベーション国際戦略総合特区など、関西における広域的なこの地域の役割を、今後、民間の方に提案していただく機会までに周知させていくことが必要ではないかと思えます。

この地区にはある程度のレベルの機能を導入する必要があると思いますが、すべての機能を完結するものではないと思えますので、いろんな関西の都市が連携して強みを出すという情報をもう少し出した方がよいのではないかと思えます。そういう意味では本日の資料が役に立つと思えます。

小林座長： この参考資料に出ているような表現を、これから民間に提案していただく際のペー

シックな資料として使うことが必要かと思います。拠点としてのうめきたがあるけれども、それは関西全体のネットワークの中で活きる拠点だという表現が重要です。

橋爪委員： うめきたの2期は、「みどり」とイノベーションの融合拠点として、この場所でイノベーションを図ることを謳っていますが、私は関西全体の圏域をイノベーションする、あるいは大阪という都市をイノベートするためのリーディング・プロジェクトだという役割を確認するべきだと思っています。

一方で、大阪の都市のこれまでの経緯を見ますと、様々な都心機能を都心に再結集することも重要だろうと思います。これまで、例えば、大学やMICE施設等、都心にあるべきものが郊外に展開されたり、MICE機能も大阪府下に散在してしまいました。それをもう一度都心に集め直すことで機能を高めるという視点が重要なのです。

MICEに関しても、うめきただけではなく、中之島エリアにある国際会議場とも近いので、連携しながら大阪の都心部に観光MICEの機能をもう一度集めるという視点が重要だと思います。

したがって、本日の3つの中核機能の基本方針の考え方で十分だと思いますし、参考資料等もそういう考え方で添付されているので、考え方が非常にクリアになったと思います。

小林座長： 機能の議論と人材の議論は若干違うように感じます。機能はできるだけ拠点に集まってほしいと思います。人材も集まってほしいのですが。

これも今朝メールを頂いた話なのですが、奈良県の桜井市で新しい業を興そうとしている方と繋がりがあって、「これからうめきたの件で、大阪へ行きます」という話をしたら、「私はグランフロントに友だちと一緒に事務所を持っている」という話を聞きました。奈良の桜井で新しい業を起こして動いている人が梅田のグランフロントに事務所を持っているわけです。

恐らくうめきたのナレッジ・キャピタルだと思うのですが、そういう人的な繋がりとして、関西全体の中でそこに人が集まっているという、その事実をできれば紹介してほしいと思っています。ナレッジ・キャピタルがあるというのではなくて、ナレッジ・キャピタルが、関西において、現段階でどういう機能を果たしつつあるのかということで、そういう人もナレッジ・キャピタルに集まって活動を始める時代になったわけです。これは小さな話ですが、大きな話かもしれないと感じました。

増田委員： 直接の中核機能ではないのですが、今の議論の中で、2点ほど、「みどり」を考える時も同じではないかと思うことがあります。一つは、我々は今、必要条件と十分条件のうちの必要条件を議論していて、民間提案の十分条件は、伸び代というか、新たなイノベーションの提案が出てくる期待感を持つべきで、必要条件を明らかにすべきというのはまさにその通りだと思います。それが1点です。

もう一つは、ここの「みどり」というのは、先ほどから出ているここでの完結型「みどり」ではなくて、ここがトリガーやショールームとなって、どのように関西圏域、もっと身近で言えば淀川や中之島にどう繋がっていくのか、あるいは大阪市内の緑の

構造に対してどういう波及効果を持つのか、その辺りがまさに今の議論と共通していて、ここでの完結性という議論ではないということがもう1点の共通の認識ではないかと、今の議論の中で感じました。

もう一点は、新産業創出、あるいは国際集客・交流、知的人材育成は少し難しいかもしれませんが、基本的に、「みどり」が生み出す新産業というものが、この中の環境・エネルギー、あるいは健康というところで、「みどり」は基盤であると同時に新産業の可能性も保有していることが認識できるのではないかと思います。

あとは国際集客・交流と知的人材育成で、特に大学のキャンパスは、いかに創造的発想を生み出すキャンパスの空間が必要かという議論があり、今までのような機能性、効率性だけのキャンパスではなくて、知的刺激になるようなキャンパスの議論がなされていますが、そういう面でいうと、この国際集客・交流、知的人材育成は、むしろ「みどり」を基盤としてどう機能するのかということになります。そのような見方をすれば、最初に出ていた「みどり」との融合でイノベーションの議論が展開できるのではないかと思います。

「みどり」そのものの話は、後ほどしたいと思います。

小林座長： 「融合」というフレーズが重要だと思っており、融合をどういうセンスで語っていくのか、これは民間にもぜひお考え頂きたいし、こちらとしても「みどり」とイノベーションの融合が重要だというメッセージを発していく必要があると考えています。そういう意味で、事務局がまとめたこのペーパーはなかなか良いと思います。

安藤委員： その通りですね。1960年以後、日本の国は効率を重視し、合理的で、機能的で、経済的で良いといわれて建築をつくってきたわけです。一方で都市もそれに倣ってきたわけです。

それに対して、「みどり」は直接的にそれほど効率があるわけではありませんが、一番重要だと思っています。例えば、中之島の国際会議場はなかなか良い会議場ですが、ポツンと一つだけ建っているので、会議が終わったら皆、すぐに飛んで帰ってしまいます。これではアフター・コンベンションは全くできません。

国際会議場が人の集まる場所にあった方が良いなら、そこで互いに交流しながら新しいことを考えます。やはり、都市の強さは新産業の育成だと思います。今、日本中の都市が観光産業に取り組んでおり、確かに、それは重要な産業ですが、大阪という都市はもう一つ新しい産業を創らなければなりません。大阪はほとんどのホテルが満室というくらい、たくさんの人を集客していますが、その中で新しい産業をどう位置付けるかという、知的なレベルの高い人たちが互いに交流しながら創り出していくものと考えています。

同時に、「みどり」も含めて、都市のネットワークに対して、市民の意識をそちらに持っていかねばなりません。東京も大阪も同じですが、市民が「これは行政がすること」と考えているところがあります。

もう一つ、企業がもっと積極的に参加しなければならないと思います。企業は本社

や支社等の会社があるので、それぞれ小さな「みどり」をネットワークできます。ですから、企業はもっと積極的に行政に参加するべきです。行政と企業が分離しては、都市はできないと思います。それを上手く結び合わせると、大阪は中心の緑化だけでなく、全体が一気に緑化できます。

そういう意味では、実際に大阪は随分と良くなっています。同時に大阪という都市の一番の魅力は、「大阪に行けば新しい産業が興っている」と思えるところで、いわゆる体の中からエネルギーが湧き上がっているという感じがあれば良いのですが、日本はそういう国になっていません。その点を真剣に考えなければなりません。

ナレッジ・キャピタルだけが頑張っても限界があるので、積極的に周りが発信しなければなりません。あの場所にあるわけですから、行政や企業ももっと積極的にレベルアップしなければならないと思います。

小林座長： ご指摘のとおり、「みどり」は当然、維持管理が必要で、特にこれだけのものをつくると、行政だけで維持管理はできません。これからの大阪は、ここだけではなく、どのように「みどり」を維持管理していくのかということも重要なテーマになります。そこに市民や企業が参加しなければ「ほんまものみどり」は育ちません。

安藤委員： 「みどり」は子供と一緒に、産んだら育てなければなりません。育てるには大変な努力が必要ですが、それほど市民が欲しているかどうかが大変だと思います。

小林座長： 「これだけの空間を創るとこれだけのものになる」ということを見せないと、そういう体験がない方々は「みどり」を欲しないかもしれない。

安藤委員： ニューヨークのセントラルパークに行くと土日は満員です。大阪の中之島辺りからずっと「みどり」があるのに、大阪の人に「散歩したら良いですよ」「一万歩歩くといいですよ」と勧めても「腹が減るだけだからやめるわ」と言われます。こういうセンスの人たちがレベルアップしなければなりませんし、これでは100歳まで生きられません。

元氣よく生きるためには、自分の精神も肉体も大事ですが、都市も同じように生きているので、皆が参加しなければならないわけです。そのためには、誰がどこでアピールするかということが重要になります。

小林座長： その時に「みどり」は先端産業としての健康と繋がっています。市民が健康というテーマで「みどり」とどう繋がっているのか、特に高齢者にとっての「みどり」の空間はどういう意味合いを持つのか、子どもにとっての「みどり」がどういう意味合いを持っているのか、そういう議論が必要ではないかと思います。

安藤委員： 大阪は結構頑張っていて、「みどり」がすごく多くなったと思います。「緑が少ない」と言われますが、マンションの前を「みどり」にしているのは大阪だけだと思います。あれだけで小さな森ができています。そういう努力はアピールするべきです。

本山ができるようなものであり、中途半端な「みどり」では弱いので、本山は「みどり」を中心にしなければなりませんし、それには、土の量も必要だと思います。

時々うめきたに行きますが、大変な集客です。東京の方が大阪駅に来ると、立体的

で大きくて力強い様を見て驚きます。そして、うめきたを通ると「凄いな」と感心し、日本でまちの中にあれだけ「みどり」があることに驚くわけです。

東京駅も丸の内の方は車ばかりですが、あそこについては、全部「みどり」にして地下に入れろと言っていました。

井出委員： 「あべのハルカス」の上から大阪を眺めると、確かに「みどり」がそれぞれの公園としてあるのですが、それらは繋がっていません。したがって、ネットワーク、つまり、広がりが必要だと思います。「この地域だけ」「この地区だけ」ということではなく、それを周辺へ広げて、ネットワークしていくことが必要です。

1日250万人が利用している駅がすぐ近くであって、商業施設もあって、さらに中核機能を盛り込むことになりますから、否が応でも非常に多くの人々がその「みどり」に接することになると思います。

そういう意味では、せっかく「みどり」があっても人があまり来ないという状況にはならないと思います。それがさらにネットワークとして広がれば、会議場での会議が終了するとすぐに帰るといった状況はなくなると考えていますので、そういう広がりが必要ではないかと思えます。

小林座長： 機能の議論が「みどり」に繋がって2番目のテーマに移っていますが、融合という話ですから一体的に議論しても良いので、そういう意見があれば頂きたいと思えます。

伊藤委員： 「みどり」と中核機能とを排他的なものを見ないで融合するというコンセプトは大変宜しいと思えます。URとしても大きな関心がある事業性の維持・向上の観点からも必要と思っており、融合することによって中核機能も独自性の高いものになりますし、「みどり」としてもより高次元なものになると期待できると思えます。民間の方々からアクティブな提案がたくさん出るように、URとしても大阪市と協力して、今後、縁の下の仕事をさせていただきたいと思えます。よろしくをお願いします。

川田委員： 非常に良い議論をしていただき、ありがとうございます。

本日、ディスカッションのペーパーを参考資料として提示していますが、「みどり」だけでもダメですし、イノベーションをしようとしても、大学のキャンパスの議論があったように、新しい知的刺激や、新しいものを発想するためには、環境から変えていかなければならないと思えます。しかし、そういう環境を備えた企業や大学が都心にはなかなかないことを考えますと、せっかくの関西の立地ポテンシャルを持った場所ですので、産業面で新しい創造力を発信するための環境装置としての「みどり」は重要であり、海外からなにわ筋線で来られた方が圧倒的な新しい「みどり」とイノベーションの融合に驚きを抱いていただくという意味でも、この2つの機能の融合は非常に大事だと感じました。

(2) 「みどり」について

小林座長： ありがとうございます。すでに次のテーマである「みどり」の話に移っていますが、先ほど事務局からお話がありましたように、部会のご意見として、篠崎氏に補足

説明をお願いすることになっています。よろしくお願いいたします。

篠崎氏： 関西経済同友会の常任幹事の篠崎です。「みどり」の専門部会報告として、先ほどのご報告に補足をさせていただきます。

私たちはうめきた 2 期に素晴らしい「みどり」の空間を創りたいと願っています。皆さんも同じ思いを持たれていると思いますが、橋下市長も「ぶっ飛んだみどり」という発言をされています。

この発言を受けまして、私たち関西経済同友会と、日本でも有数の「みどり」の専門家の方々の議論を取りまとめてご報告させていただきました。

私たちは「ぶっ飛んだみどり」というのは、「ほんまもん」すなわち本物の「みどり」、本物の緑地であると考えました。

世界の都市は苦勞しながら都心に緑地創造を競っています。その中で先般、うめきた 2 期のまちづくり方針の中間取りまとめ、骨子案が公表されましたが、それによりますと、「みどり」の広さは概ね約 8ha、うち概ね 4ha を事業実現性の観点から地表面と一体となった「みどり」とし、公共が都市公園として整備して、残りの 4ha は民間が所有することになっています。民間の場合は、事業の採算性を考えますと、建築物と一体となった「みどり」が中心になると考えられますので、そういう中で、私たちは「みどり」の専門部会として、「みどり」の面積を「可能な限り広く」と表現しています。世界都市の顔として、世界の都市間競争においてインパクトのある「みどり」を考えますと、可能な限り広い面積のオープンスペースが必要ではないかと考えますが、その中でも特に重要と考えているのが、公共ができるだけ広く土地を確保して公園として整備するという事で、民間にある意味で過度な負担をかけない方法が、より良い「みどり」を創ることに繋がるのではないかと考えています。

その観点から述べますと、公共による取得が 4ha というのは少ないと思われ、これでは不満足です。もう一段、二段、三段、規模を広げた努力をお願いしたいと考えています。

今まで議論された中核機能に関しても、採算が簡単に得られるようなものではなく、かなり先行投資のような機能を民間に期待されているように思います。そうすると、「みどり」でも、中核機能でも、民間に過大な負担をかけることとなりますので、そうではなくて、できるだけ良い「みどり」を創っていくことでは公共の役割として、できるだけ広い面積を確保していただきたいと思っています。

もう一点重要なのは、参考資料 1 の P3 の左側に書かれている「みどり」のあり方です。公共が創る地上のまとまった「みどり」の方には、恒久性、永続性が担保されるとある一方、建築物と一体となった「みどり」の方には、恒久性、永続性の点でどのように担保できるかが書き切れない部分があるのではないかと推測されます。人工構造物上に緑地を創る場合、将来的に老朽化による建替えによって緑地がビルに変わるようなことがあってはならないので、「将来、構造物が老朽化して建て替えを余儀なくされた際には、再び緑地として整備する」という規制、縛りをかけていただくこ

とが必要だと考えます。資料の右側の「みどり」に関しても、持続性、恒久性をどう担保するか、これはしっかりと規制をして頂きたいと思っています。また、他都市の例を見ましても、構造物の上に創った「みどり」は、最初はオープンであっても、時間の経過とともに人々を排除する方向に向かっているような例がありますので、持続性、恒久性ととも公開性の担保を議論していただきたいと思っています。

もう一つ、部会での市長発言でも、利用者の視点を踏まえるということでしたので、緑地利用者の意見、特に市民、ユーザーとの対話も、是非この検討会でお願いしたいと思います。

最後に、世界の都市は今、緑地創造を競っています。大阪の玄関口であるうめきた2期地区に「ぶっ飛んだほんまものみどり」を整備することが、大阪の都市格を上げ、大阪を世界都市として認めさせる最大、最後のチャンスとなります。したがって、皆様には、50年、100年の長期的な視点から「みどり」についての検討をお願いしたいと思っています。ありがとうございました。

小林座長： 篠崎氏から「みどり」についてご意見をいただきました。予てより、いろいろと資料もいただいておまして、そのご意見も受けながら、「みどり」についてももう少し議論したいと思います。

宮原氏： 先ほど、「みどり」は中核機能の健康・医療に繋がるという意見がありましたが、ある意味でそれは正しくて、そういう雰囲気健康・医療に寄与するというファクトであり、「みどり」をそういう意味で捉えるのが本当の融合だと思います。したがって、「融合」が健康・医療に繋がるのが、「ぶっ飛んだ、ほんまものみどり」だと解釈すべきだと思います。

そうした時に、それを実現するための重要なファクターとしては、もちろん面積も重要かもしれませんが、それが唯一ではなくて、それ以外にどのような融合の方法があるかということを考えるべきだと思います。

小林座長： それを民間に提案していただくということですね。

宮原氏： そうです。ですから、「これだけの面積でぶっ飛んだ『みどり』にする」「全部『みどり』にしろ」という議論は、提案を出す土壌を規制にかけることとなります。民間からベターな案が出やすい枠組みを創るのがこの骨子案の目的だと思っています。

小林座長： 先ほど頂いたご意見の真意はそういうことだろうと思います。

室崎委員： 「みどり」とイノベーションがいわゆる二枚看板で、併存、並列ではなく、「融合」ということに意味があると思います。

その一つは、エネルギーや健康と「みどり」が融合できるというイメージです。しかし、人材育成と「みどり」、国際集客と「みどり」はどう融合させるのかという課題があります。単に飾り物なのかということになりますが、例えば、そこに「みどり」があって、皆が運動して一生懸命動き回ったり、木陰で集まっているんな議論が起きたり、そういう中から新しい創造が出てくるようなことかもしれませんし、あるいは、篠崎氏が言われたように、世界に誇る「みどり」の空間ができて、単に会議に来るだ

けではなく、その「みどり」を目的に人々が集まってくる、国際集客できるような発信力のある「みどり」かもしれません。

私が言っているのは、「みどり」というとすぐにエネルギーやこういうところに結びつけて議論されますが、この中核機能の2つ目、3つ目と「みどり」がどう関係するのかというところをもう少し詰めなければならないのではないかと思います。

小林座長： 私の発言も、まさにそういう意味です。東京で都市型 MICE を実施しますが、それは人工空間の中に都市づくりをして、国際フォーラムという施設とそういう空間が一体となって都市型フォーラムをするという話です。大阪はそれとは次元が違います。都市型 MICE を「みどり」の空間を使って、国際的な会議場と一体となった空間として利用することが重要ではないかと冒頭に申し上げたわけです。

室崎委員： 単に会議場の前に「みどり」があるだけでは融合とは言えません。「みどり」が発散するいろんなエネルギーや空気など、そういうものが会議を左右するような関係ができなければなりません。

増田委員： それと同軸上の議論になると思いますが、「みどり」から見た土地という観点で捉えますと、ヨーロッパには「ブラウン・フィールド」と「グリーン・フィールド」という考え方があります。「グリーン・フィールド」は人間活動によって劣化していない自然環境で、一切手を付けずに残そうとするもの、「ブラウン・フィールド」は一定の人間活動によって環境が劣化した用地で、何らかの意味で都市活動と併合、融合しながら環境再生をしようという、これが大きな国家全体の戦略の考え方です。

日本の場合、やや「ブラウン・フィールド」を食い潰しているようなところもありますが、ここはまさにこの「ブラウン・フィールド」における新たな融合形態をどう我々が提示できるのかという場所だと認識するべきです。今ここには一本の木も自然もありません。ただし、自然の手がかりが全くないわけではなくて、その中でどう「ブラウン・フィールド」として再生、創生していくのかということ、まず大きく認識をしなければなりません。それが、「みどり」から見たこの土地の見方だと思います。

もう一つ、それを行う時に、再生や創生をする時につくった「みどり」をどう維持管理するのかというところで、守りの姿勢ではなく、例えば、数年前に名古屋の COP10 において、日本が「みどり」とどう付き合ってきたかということ、世界に発信した「SATOYAMA イニシアティブ」が挙げられます。それはサンクチュアリ的に緑を残すのではなくて、人間が農村生活の必然の中で裏山と付き合ってきたことが、まさに今の日本の森林文化や環境文化を育成してきたということであり、それを伝達したいがために「SATOYAMA イニシアティブ」を打ち出したわけです。

まさにここで我々が打ち出さなければならないこと、あるいは期待していることは、都市と自然と人間との新しい関係性という必然の中で、どうその提案が出てくるかということです。そういう新たな関係性を求めたいと思っています。実際に、今は里山を見出せません。昔は農村生活の中で資材の獲得の場であり、エネルギーの獲得の場であり、林産物の育成の場であるという必然性の中で環境が担保できましたが、その

必然性がすべて石油製品に置き換えられた時に、里山は失われてしまったわけです。その必然性をどう構築するのか、その新しい関係性をどう求めるのかということがまさに求められていて、ここでの「みどり」もまさにそういうことだと思います。

完成した「みどり」をどう維持管理していくのかという消極的な話ではなく、「ブラウン・フィールド」における必然性、新しい関係性の中で「みどり」をどうつなげ、どう育成していくのかということです。そういうショールームやトリガーとなるという意味では、単なる面積の話ではなくて、むしろそういう新しい挑戦がどれだけフィジビリティを持って提案されるかということが重要なのです。それが、まさしく新たな都市文化なのではないかと思います。「みどり」に対して、そういう見方をしてほしいと思っています。

つまり、ここはショールームやトリガーとしての役割であって、これが中之島や淀川等を媒介にして関西都市圏にどう繋がっていくのか、そういうことを考えてほしいということであり、一番難しいのは、新しい関係性を都市の中でどのように築いていくのかということです。

大阪の都市の「みどり」は閑散としていて、ニューヨークや東京、北京の都市内の公園は賑わっているという話は、都心居住がどういう形で成立しているかということに大きな意味があります。世界都市を見ると、都心居住が成立していたら必然的に公園は賑わっています。公園が夜に閑散としていて使われないのは、都市が 24 時間型の構造になっていなくて、都心居住がないからであり、そういう意味で、こここのベースに「みどり」を持ち込むということは、大阪のまちそのものを「都心居住を発信している拠点」にするということです。「みどり」を中心に据えるということは、大阪のまち、あるいは大阪市のまちの構造そのものを変えていくという、一つのシンボルになり得るのではないかと、そのようなことを思っています。

小林座長： 確かに、これは国土交通省、国が言っている集約型都市構造という議論かもしれませんが。どのような集約型の住み方ができるのかと考えると、ヨーロッパのように「みどり」の無い空間を創り出して「これが新しい日本の住み方」とする議論は恐らく無いだろうと思います。そうすると、そういう中にどのような形で「みどり」を入れた住まいができるかということが、一つの目指すべき方向であるということです。そのショーケースとして使ってはどうかという議論です。

それから、最近「里山資本主義」というような話が出ており、経済と「みどり」がどう繋がっているのかということも重要な議論となっています。これはここで決めることではなくて、そういうフレーズを我々が会議で議論し、民間にそういう側面での提案を期待するというメッセージを出していくことになると思います。

ありがとうございます。他にいかがでしょうか。

橋爪委員： 「ブラウン・フィールド」をどのように新しい「みどり」にしていくかということが非常に大事だと思います。当初から、従来の都市公園ではない、そういうものをつくりたくないが故に、我々は括弧付きの「みどり」を位置づけてきたと思います。

従来とは違うタイプのもものとして、公共が整備するにしても、「みどり」のある新しい施設概念をつくらなければならないということです。ドイツのルール地方のエムシャーガーデンは、汚染された「ブラウン・フィールド」が連鎖しているようなところをかつてなかったような公園にしました。そういう世界中が注目するような大胆な「みどり」の構築が、ここでも行われるべきだと思います。

小林座長： そういう意味では、資料 2 にあるように、「みどり」によって「都市と人間、自然の新しい関係性を構築し、比類なき魅力を備え、都市の文化として創造・発信する、新しいまちづくりの空間と概念を導入する」という表現はいかがでしょうか。

増田委員： 必要条件はかなり満たしているのではないかと思います。先ほど必要条件と十分条件という話がありましたので、そういう意味では、必要条件は満足していて、後は新しい関係性の構築というような提案をどの程度していただけるのかということになります。それは非常に楽しみですし、期待をしているところです。

橋爪委員： 民間の提案もそうですが、行政が整備する公園もまさにこの新しい関係性をつくるという志で計画していただきたいと思っています。

長島委員： 参考資料 1 の P3 の図を見ながら思ったのですが、橋下市長は当初から、この 2 期の開発を「閉じたものではなくて、周辺にいろいろな可能性を出していくようなものでありたい」と発言されており、本日の事務局の資料でも、少し色は違いますが、周りに染み出す「みどり」が描かれています。これについても、何らかの可能性を検討することが必要ではないかと思います。篠崎氏が使われたインセンティブという言葉との関係性も含めて、また違う場で、周りの動きや方向性を、大阪市が中心となって検討されると、いろいろな可能性が出てくるのではないかと思います。

小林座長： それは参考資料としてそういうものを用意してほしいということでしょうか。

長島委員： 用意するというよりも、ここでこういう表現をしたことを今後どう捉えていくのかということ、大阪市等で少し検討して頂きたいということです。

小林座長： 将来的に民間から「これはどういう意味ですか」と聞かれる可能性があるのですが、それに答えられる材料を持っておくという意味だと思います。ありがとうございます。

他に「みどり」に関連してご意見はありませんか。

委員一同：(意見等、なし)

(3) なにわ筋線について

小林座長： それでは、3 番目のテーマに移ります。なにわ筋線に関する議論です。

これについては、この会議ではあまり中心的に議論されていないと思いますが、前回の部会で、特に橋下市長からお話があり、また、アクセスの問題の重要性については、部会の行政側の委員からも出ています。

川田委員： なにわ筋線は、JR と南海電鉄が相互に乗り入れる地下路線で、JR は「はるか」「くろしお」に加えて、できれば関空快速のようなものを通したいと検討されています。南海電鉄はラピートや特急を入れたいということで、約 40 分強で関西空港に着きま

すし、一番速い電車は 40 分を切る場合もあります。そうなりますと、もちろん成田空港よりはアクセスが良くなりますし、羽田空港と比べても遜色のない位置にうめきたが位置づけられることとなります。

また、部会では、JR 西日本の社長がおおさか東線という大阪東部外周の環状ルートが新大阪に乗り入れることも検討していると話されており、かなり広範なネットワークがこのなにわ筋線に乗り入れることとなります。

その点を踏まえてご議論いただければと思います。

小林座長： 私が関わっている「大手町丸の内有楽町地区計画」では、関係者から「どれだけ地下鉄網が整備されているか」「少し歩けば駅が 8 つくらいある場所だ」ということを年中聞かされてきました。そういう意味で、なにわ筋線の意義は非常に大きいのではないかと個人的に思っています。

できれば、そういう比較の資料もあると良いと思います。今の資料は、御堂筋線等のいくつかの地下鉄路線があって、うめきた関連の鉄道網がこのような形でできているという資料ですが、東京の都心部ではさらに新たな線をつくらうと、いろいろ動いているところがあるので、そういう新たな動きも含めた資料を作って、なにわ筋線の意義、必要性をしっかりと確認していただくことも必要ではないかと思えます。

増田委員： それに関連して、駅密度も大都市格を表すものと言えます。例えば、パリの都心部の 1km²あたりにどのくらいの駅数があるかを考えると分かりますが、そういう意味では、多分、東京に比べて大阪は 1km²あたりの駅数が少ないと思います。それに対して、梅田の近辺は世界標準並みの駅密度になっているというような資料ができると面白いと思います。

また、時間短縮効果は良いのですが、利用者の視点から言うと、時間の短縮と同時に間隔が重要です。需要と供給の関係で、それほど短間隔で輸送できないとは思いますが、乗車時間は短くても乗継の間隔が大きいと乗継抵抗から見て長時間化しています。単に時間短縮は所要時間の短縮と、間隔の短縮をどうできるかというのは、利用者側から見ると非常に大きな視点だと思います。

小林座長： 都心にどれだけ人が住んで、生活活動をしているかということですね。

増田委員： そういうことだと思います。

長島委員： このような新線の動きや駅の話や、既存の JR 大阪駅との関係等についても、より利便性が高まるような形の検討を鉄道と大阪市でしていただくと良いと思います。

「みどり」にも関係するかもしれませんが、まさにアジアのゲートウェイになるので、海外の方がうめきた新駅で降りて地上に出た時に、広場空間を含めた見え方として、1 期はあのような形をつくられたわけです。2 期はそれがまた少し進化するような形で、きちんとした空間形成ができるような検討も準備していただきながら進めていくことも必要だと思います。

小林座長： JR との繋ぎの話は、本当は駅の「見える化」のような話が必要で、案内を見なくても一目で駅全体の構造が分かるような空間づくりができると良いと思います。

最近、アーバンコアやステーションコアという言葉が出ていますが、コアをつくって、そこに入ると全体の駅の構造が分かるような駅空間づくりが議論されています。大阪駅でそれにふさわしい空間がどこにできるかは、実際の構造上は難しい面もあるように感じますが、できるだけそういうことが実現できるような提案をしていただきたいと思います。新たにつくるものは、地下に入るから、地上は全部覆ってエスカレーターで降りればよいという駅空間では困ります。新駅や広場は積極的に新しい駅空間として考えることも提案していただきたいと思います。

橋爪委員： なにわ筋線の構想自体は 1980 年代からあり、うめきたそのものをどうするのかという議論が始まった時からあると理解しています。したがって、答申では平成 16 年 10 月に中長期に整備される路線として位置づけられています。本当はもっと前から検討されていて、できるだけ早急につくるはずの路線だったと思います。

ただ、当時とは状況がかなり変わったところもあり、鉄道に乗車する人のニーズも考えなければなりません。それは時間短縮だけの話ではありません。これからは、ベイエリアに IR ができて、USJ の新しいパークができて、環状線の西九条駅辺りのやりくりが大変になると思われるので、要は環状線の負荷を低減するためにも、母都市に直結するなにわ筋線は必要だと思います。したがって、昔とは少し状況が違うような気もしますが、大阪の都心部の交通の需要を見ながら、必要な路線であることをきちんと書いていただければ良いと思います。

また、職住近接で、今、大阪も都心部に人口が戻って、船場や堀江辺りはタワーマンションができていますので、都心部とうめきたを直接結ぶ路線としても位置付けられると思います。

この路線が広域の中でうめきたとどこを結ぶかという話をきちんと書いて、関空との時間を短縮するだけの意義ではないことを意識しなければならないと思います。

小林座長： うめきた、特にグランフロントの開発は東京でもかなり評判になっており、先日もあるところで大平元首相の孫娘の方と会食する機会があったのですが、彼女が「グランフロントは凄い」と言っていました。東京から来た人にとっても、それほど印象が強いようです。それを活かさない手はありません。恐らく、2 期の開発と一体となって新しい拠点になることは間違いないので、拠点として活かせるための鉄道網の整備が必要です。

今、グランフロントは関西以外から人が来ていると思いますが、どの辺りまでテリトリーとして人が来ているのか、その辺りの情報があればいただきたいと思います。そのような調査はまだされていないのでしょうか。関西圏でこれだけのものをつくって、どれだけ拠点になっているのか、1 期の開発だけでもこれだけの拠点性を持って人々を惹きつけているというデータが是非ほしいと思います。

事務局： 事業者と話をしていきたいと思います。

川田委員： 先ほどの長島委員の話について、新駅をつくるということで、広場はまだ確定ではありませんが、恐らく今 JR が所有されている土地と区画整理で入れ替えて、JR の土

地になる可能性が大きいと思います。その時に、関空から来られた方や、梅田エリア全体でいろいろな方が来られると思うので、駅や駅周辺にいて梅田全体が分かるような機能面での分かりやすさと、都市空間として付加価値の高い空間をどのようにつくるかということが、うめきた2期のポイントになります。1期の広場とは道1本隔てているので、物理的な一体性が若干難しいのですが、心理的な一体性も考えて、駅前空間をつくっていく必要があります。そういう部分を何らかのメッセージとして発信できればと思っています。

小林座長： そういう意味では、JR との関係性も重要です。互いに協力し合って、新しいうめきた空間を創り出すということです。

他にご意見がなければ、最後のテーマに移って、残りの時間で総論的な議論をしたいと思います。

(4) 防災について

小林座長： 最後のテーマは「防災」ですので、まず、室崎委員にご発言をお願いします。

室崎委員： 「防災」については2つの見方があります。一つは、防災と自然や都市機能が両立するよう、アクティブに受け入れるという考え方です。もう一つは、ややもすると経済性と防災性は対立することがあるという、その両方の問題点があると思います。

前者を、私は「アメコミセキュリティ」と言っていますが、アメニティとコミュニティがあれば、結果としてセキュリティはついてくるという考え方です。豊かな自然があって、豊かな文化が育まれていて、そこに人と人との活力ある触れ合いがあれば、それが究極的に安全を保障するので、むしろそういう視点で「みどり」等を捉えていかなければなりません。

ただ、いつも防災は「隠し味」と言っています。表向きは非常に活力があって、「みどり」があって、人が集まってくるという楽しい空間を創ることを基本にしながら、そこに隠し味として「防災」があるという発想がとても重要だと思っています。

そういう意味では、個人的な意見になりますが、うめきたにどれだけ人を集めようとしているのかということが気になります。一つの地域に人を集めすぎるのではなく、むしろ大阪は自立分散型連携の都市構造のようなイメージがあります。いつも梅田にいるのではなくて、時には天王寺に行くとか、ある程度うまく分散しなければなりません。過度に集中させると、せっかく帰宅難民のための広場をつくっても、人が多過ぎてすぐにいっぱいになってしまいます。

そういう意味では、森を創る、「みどり」を創るということは、梅田にゆとりを与えることであり、ゆとりの空間を与えることによって、過密の弊害をコントロールする機能もあるので、集積と分散の折り返しをどのようにつけるかによって、都市特有の危険性をどう解消するかを考えることが必要だと思います。そのように、繋いでループで回すのは良いのですが、全部梅田で降ろそうとすると、厄介なことになると思います。防災上から言えば、ある瞬間、そこに何人の人が滞留しているかを考えると、

地震が起きても命を守り切れないこともあると思います。新宿や渋谷を見ると「このまちはいざという時にどうなるのか」といつも危機感を覚えます。したがって、過集積と安全の関係を頭に入れておかなければならないというのが、一つのポイントです。

もう一つのポイントは、まさに環境共生です。基本的に「みどり」は人間に優しいのですが、時として横暴になることがあります。つまり、適度なメンテナンスが必要であり、『みどり』を創ったら安全』と考えてしまうと困ります。そこに野良犬が蔓延るかどうかは分かりませんが、そういうことも考えられるわけです。場合によっては、もっと獰猛な動物が棲みつくとか、あるいは、夜中は閑散としていて暴行の空間になることもあるので、自然が持っている優しさと厳しさをよく見ながら、自然を味方につけるような発想がなければなりません。『みどり』を創ったら安全』とは言い切れないという視点で、自然と人間の間を関係性を考えなければなりません。

私は、自然と人間の間については、過集積と分散のバランスを上手くとった形で、ここの土地利用や全体像を見なければならぬと思っています。そういうことさえしていれば、「みどり」の豊かな空間が増えることは、大阪の安全に寄与することになると考えています。

防災に関して「こういうことをしなさい」と言うつもりはありませんが、強いて言うと、エネルギーの自立、インフラの自立はとても重要です。地震が起きたその日でも、水とガスがあって資源があれば、梅田の飲み屋街は営業しているという状況が生まれます。つまり、被災した人は避難所で炊き出しをもらわなくても、梅田に行けばよいわけです。その原点はエネルギーです。自立的なエネルギーをその空間でしっかりと確保すれば、被災してもその日から暮らしていけます。

したがって、要件として、自立的なエネルギーシステムを是非ここに盛り込んでほしいと思います。防災からお願いするのはその程度です。

小林座長： その程度と言われますが、ほとんどすべてだと思います。

安藤委員： 今、室崎委員が言われたように、アメニティとコミュニティがなければならぬという意味では、普段から出かけて行くところでなければ防災にはなりません。

私は 15 年ほど前、日本で一番過密と言われている豊中の庄内で、駅の東側にあったパナソニックの工場移転跡 4,000 坪を防災公園にするよう提案し、全部を桜の公園にしました。4,000 坪の中に備蓄庫などいろいろなものを用意しましたが、それを企業がサポートしています。同様に、門真にも 4,000 坪の防災公園をつくってもらいました。両方とも 4,000 坪で、普段は桜の公園で、アメニティにもコミュニティにもなりますが、いざという時は防災基地になるので、備蓄庫があります。備蓄品はある程度の時間で入れ替えなければなりません。企業はそのくらい積極的に都市防災に参加した方がよいという話をしていたら、パナソニックの当時の中村社長が「ぜひ、やりたい」と名乗り出てくれました。それで、東京では幕張に 10,000 坪、茅ヶ崎には 15,000 坪くらいのものでつくっています。

そのように、企業が社会に参加しながら、かつ「みどり」にもなる、防災基地にも

なるというものをつくっています。

防災基地については、阪神淡路大震災の時に小学校や中学校に行きましたが、備蓄もなかったのもので、そこに積極的に企業が参加していかなければなりません。企業は立地の良いところに土地を持っていますので、どのように依頼してコミュニケーションをするかということが大事です。防災は自治体だけではできません。備蓄が厄介なのは入れ替えなければならない点であり、そういうことを考えると、企業との連携がなければ難しいと思います。

同時に、うめきたもそうですが、先ほど言われたように、集まり過ぎると大変です。今は集まり過ぎているので、都市の魅力を分散型にしなければならないと思います。その時に、しっかりとそこが防災基地になっていなければならないと思います。今の構造体はかなり強固ですので、新しい建築物は十分に防災基地になります。したがって、行政指導で「大きな建物はすべて防災基地にすること」「防災基地にしないところは大阪から出てください」と言うくらいの気迫で取り組まなければなりません。

そういうことを通して、企業と社会、企業と個人、そして市民が意識を変えていかなければなりません。行政だけでは防災基地をつくるのは困難です。

東京は、石原都知事の時に結構つくったのですが、都民は知りません。何のためにつくったのかと思います。都民が知らなければ防災自治になりませんが、そのアナウンスが少ないのです。都市は安全だと思っている人たちが多から行かないかもしれませんが、その辺りの意識改革と、同時に機能の両方が重要になると考えています。

小林座長： 室崎委員の話と、安藤委員の話を伺って、2期開発には、グランフロントに人が集まり過ぎているので、空間として広げる機能を果たすという意味もあると思いました。しかし、それだけでは十分ではないというご指摘で、もっとネットワークを組んで分散的に大阪の拠点ごとに人が集まって、全体として大阪が盛り上がり、安全なまちにしなければならないというご指摘です。

安藤委員： もっと人が来ると思います。来年からビザの問題を開放しますので、台湾・香港、中国、韓国から人が来ると大変な量になります。もし、今の2倍の人が来たらどうなるのでしょうか。その可能性はあります。

小林座長： その可能性はありますね。ユニバーサルスタジオには、日本人だけではなくて、海外からも来ると思います。

安藤委員： ユニバーサルスタジオは大変な時間待ちで、切符を買うのに2時間待ち、アトラクションに乗るのに2時間待ちという状況です。それでも多くの人々が来ます。もっと多くの人々が来ると溢れてしまうので、うめきたに行くわけです。その時に、2倍の人が来たらどうするのか、防災上はそこが問題です。

川田委員： すぐに対応するのは難しいのですが、2期の理論で言いますと、1期は2階のデッキが多く使われていて、平面は横断歩道が横にあって使いづらいし、地下は大阪駅とAブロックしか結んでいないということで、全体としてややネットワーク性が弱い状況になっています。

したがって、2期の計画では、デッキのネットワークや、駅を介した地下のネットワークをしっかりと、しかも分かりやすくつくるのが大事なポイントになると思います。その辺りをしっかりと実現したら、2倍の人が来たらどうなるかは分かりませんが、多分、大丈夫だと思います。

安藤委員： 今、中国から日本に来る人はビザが必要ですが、これが非常に面倒なので、それが不要になれば、雰囲気的には間違いなく2倍の人が来ます。うめきたの2期を早く整備してもう少しゆとりをつくらなければ、大変な事態になるのではないのでしょうか。

小林座長： 全く客観的な立場で言うと、やはり平面は繋ぐべきだと思います。

橋爪委員： 大阪全体の外国人観光客は2020年に今の2倍を目標にしています。

安藤委員： 目標にしない方が良いのではないのでしょうか。

橋爪委員： 国全体もそのようなペースで、観光立国で倍増に近い数で増やしています。これからは中国だけではなく、タイやインドネシアからの観光客も増えますので、ますます速いペースで増加すると思います。したがって、2倍になることを想定して考えなければならぬと思います。

小林座長： 最低でも2倍ですね。

安藤委員： そうなった場合、関空のキャパシティは大丈夫なのでしょうか。今、成田は増設していますし、もちろん羽田も整備していますが、関空のキャパシティでは2倍の利用者に対応できるのでしょうか。今でも、飛行機の便が取れなくて困っています。

川田委員： 細かい数字は覚えていませんが、関空は年間約13万回の発着で、16万回くらいまでのキャパシティがあります。運用の仕方によってはもう少しアップしますので、観光客だけであれば十分に捌けるはずですが、ただ、望む時間帯に乗り入れ便を受け入れられるかどうかという問題はあります。今、関空もピーク時間帯が非常に増えていますので、皆が夜の乗り入ればかりリクエストされると16万回も可能ですが、ピーク時の処理を考えるとキャパシティの問題が出てくるかもしれません。

小林座長： 橋爪委員が言われるように、それほど外国からの観光客が増えるとなると、ここで議論している内容とのタイムラグをどう凌ぐかということが一つの課題になります。

川田委員： そういう意味では、なにわ筋線が環状線のダイヤに左右されるところがありますので、できるだけ早く整備することと併せて、うめきた2期のスケジュールをどうするかという問題があります。

それについては私見ながら、今年度の方針を作り、来年度に必要な都市計画の手続きや、民間に譲渡する土地の場所や形を決めた上で、その次の年度くらいには事業者を決めて、早期にまちの建設に入っていただけるようにしたいというのが我々の思いですので、観光客が増えていく中で、それをとり逃すことのないように、スケジュール感を持って取り組みたいと思っています。

宮原委員： 防災環境のまちづくりは、前回、私が話した本当の意味でのスマートシティをつくる一つのファンクションだと思います。そうした時に、ただ防災システムをつくるだけではなく、例えば、防災関連の研究機関を誘致すると、企業がここに進出してきま

すが、その企業は新産業創出の環境エネルギー等々に関係するはずで、したがって、防災環境のまちづくりは独立したものではなくて、新産業創出に関連づけて考えた方が良いのではないかと思います。

小林座長： その通りだと思います。

井出委員： 先ほどの「みどり」の議論の中で、「自然と人間との新しい関係」という話がありましたが、実は、橋下市長が大阪府知事の時に、校庭の芝生化を提唱され、私は土木の所長として、校庭の芝生化に取り組みました。

実は、この校庭の芝生化は「みどり」だけをつくったのではなく、その学校に通って来る生徒の父兄に関して、今まで粗かったコミュニティの関係が密になるという現象を起こしました。学校によって上手くいったところと、上手くいっていないところがありますが、上手くいったところは、互いに面識ができて、地域のコミュニティの中でどこに非常時に逃げられない人がいるのか等も分かるようになり、地域力が向上しています。場合によっては、自主的に防災訓練をしたり、あるいは備蓄をしたり、防災や防犯等に活動が繋がっていく様子が地域によって見られたわけです。

したがって、この「自然と人間との新しい関係」をこの地域で創ることによって、ある意味、全く別業種の企業にも互いに繋がりが生まれて、それで備蓄ができるかもしれない。

2 倍の観光客は来街者の話で、芝生化のような夜間人口の話ではないかもしれませんが、そういうことも議論されて、どのような取組みをすればよいかということが、そのまちの中で考えられ、つくられていくことは望ましいと思うので、やはり「自然と人間との新しい関係」の中にそういうものが入ると良いと考えています。

小林座長： 今のご意見が、私が 10 年くらい前から言っているエリアマネジメントです。私が関わっている丸の内は、最初はまちづくりから入ったのですが、最近は、丸の内にどう自然を植え付けていくか、皆が協力して自然を丸の内の中に活かそうとしています。最近は、生物多様性の議論を丸の内にどのように持ち込めばよいかという議論にまで発展しています。

防災面でも、六本木ヒルズでは「逃げ出す街から逃げ込める街へ」というキャッチフレーズで、防災拠点として考えようという話が出ています。丸の内もそれと同じように、逃げ込める街にしようと考えています。

それで、先ほど安藤委員が言われたように、備蓄の入れ替えが必要なので、私が理事長をしている大丸有エリアマネジメント協会では、協会が費用を負担して、ストックしている薬品を定期的に入れ替えるという役割を担っています。それぞれの企業、それぞれの団体が、大丸有地区で災害が起きた場合にどのような働きをするかという役割を分担していて、その一端を我々が担っているという関係になっています。

したがって、そのような仕組みをうめきた全体でつくって、さらに「逃げ込める街」にするためには、周辺との関係をどう考えるかということを検討しなければならないと思います。これからうめきたが開発されれば、周辺もそれに伴って大きく変わり、

周辺に新しいまちづくりが起きると思います。その時に、先ほどの「みどり」の議論や防災の議論に周辺と一体となってどう組めるか、その議論も重要かと思います。

民間に提案していただく時に、そのくらいの構想を是非、ご提案いただきたいという話ではないかと思います。

増田委員： 先ほどの「みどり」と防災の関係で言うと、「アメコミセキュリティ」はその通りだと思いますが、もう一点、あの地区全体でオープンスペースを持つ意味と役割分担の問題があります。

つまり、建物施設が持っている機能と、オープンスペースが持っている機能があって、オープンスペースが持っている機能の中には、重装備化せずにいろいろな要求に応じて可変性を担保できるという大きな特性があるので、災害の内容や経過の時間等に対して自由に可変できるスペースとしてのオープンスペースの役割も考えておかなければならないと思います。建物が持っている役割とオープンスペースが持っている役割をどのように融合させていくのか、その辺りもいろいろな提案が出てくると良いと思いますので、時間軸を組み込んだ中で、どう展開していくかという話が出てくると、非常に面白いと思います。

小林座長： オープンスペースについては、単にオープンスペースで良いのかという議論があって、最近ではオープンスペースの中にいろいろな機能を埋め込んでおいて、いざという時にそれを活かすという議論もあります。

増田委員： ですから、地下にどのくらい構造施設を持てるかという話と同時に、上は自由に可変性を持っているという、そのような有用性をどこかに組み込んでおいていただきたいと思います。

小林座長： 重ねて室崎委員から何かありませんか。

室崎委員： 今の増田委員の意見に関連しますと、オープンスペースの「みどり」の部分と、建物の中も防災はとても重要になっています。安藤委員が言われたように、今の新しい建物は防災拠点になるという意味では、例えば、ホテルのロビーが非常時にケガをした人の看護空間になる等、使い方はいろいろと出てきます。したがって、防災面では、中と外を一体的に考えることが必要だと思います。

安藤委員： 日本の国は火山の上にあるので、どこでも地震が起きますし、現実に各地で地震が起きています。そう考えると、「みどり」も大切ですが、防災が一番大事です。それが、これまで都市の中であまり重要視されてこなかったと思います。それについて、ここでは市民と企業が共に頑張ることが大事ではないかと思います。

小林座長： やはり、人と企業の繋がりがなければ、いざという時に防災機能を発揮しないということですね。

安藤委員： もう一つ、「みどり」も防災も費用がかかります。それを市民が必要とするならば、積極的に自分たちも費用負担をしなければならないと思います。

私は、瀬戸内オリーブ基金をユニクロと行っています。これは 15 年ほど前、河合隼雄氏が文化庁長官の時に、河合氏と私と中坊氏とで始めたものですが、ユニクロの

店舗に募金箱が3つ置かれていて、その一つに30円入ると、3つで100円になります。ユニクロは1,000店舗ありますので、その計算では毎日10万円、年間4,000万円になります。実際は1億円くらいありますので、それによって瀬戸内海の禿山で植樹活動等が行われています。

市民が参加しますので、コンビニや駅などに募金箱を置いて、積極的に募金活動を行うと、それほど難しい問題ではありません。1円ずつ入れてもらうだけで、1日に100万円くらいすぐに集まります。市民も、自分の募金が森を育てることになるので、そのような方法が良いのではないかと思います。地道に体力のいる活動ですが、現実にはどのようにして「みどり」を創るのかということを考えて方が良いと思います。

また、2020年の東京オリンピックに向けて、60万人から1,000円募金を集めて6億円くらいかけて100haの「海の森」を整備しています。土は東京都から、植木は募金で賄って10年くらい前から整備しており、既に完成して結構な森になっています。

そのように、大阪でも誰かが手を挙げて、市民が1~2円を店頭で募金して、自分たちで森をつくるというシステムを作ってもらおうと良いと思っています。

関西経済同友会は力を持っているので、同友会が集めてはどうでしょうか。同友会には多くの会社が参加しているので、その会社に呼び掛けて、コンビニ等に協力してもらおうと上手くいくと思います。これは市民の意識も喚起しますので、良いと思います。

小林座長： その別版を丸の内で行っていて、Suica、PASMOで買い物をすると、100円に1円の環境基金が貯まるようになっています。

安藤委員： それでは、市民の意識が喚起されません。勝手に基金に取られるのではなくて、自分で募金箱に入れなければなりません。

小林座長： 確かに、基金の目的は表示されていますが、寄付するという意識が若干薄くなるという心配はあります。

安藤委員： やはり1円でも自分の意思で入れることが大事です。入れる人は「何の募金なのか」と見えています。それを通して、他の企業もそれを行うということです。

小林座長： ありがとうございます。終了の時間が迫っておりますが、追加的なご意見があればお願いいたします。事務局から追加する意見、あるいは事務局としてこのように対応したいという話があればご発言をお願いしますが、いかがでしょうか。

委員一同： (追加意見等、なし)

事務局： (補足等、なし)

小林座長： 宮原先生が最初に言われたように、これはあくまでも民間企業の自由な発想、大胆な発想、新しい発想をいただくための指針であり、あまり縛りをかけずに、領域を示すものです。しかし、要点を外してはなりません。そういう意味で、本日、要点として事務局が作られた資料は大変良くできています。その中で、「みどり」と新しい機能の融合はまさに要点であり、肝要な言葉であることを認識していただいた上で、ここに書かれていることについて、かなり自由に発想していただく、そういう

指針として、もう一度開催される委員会に向けて、改めて事務局に資料を作っていた
だきたいと思います。

橋爪委員： 1点だけ確認したいのですが、なにわ筋線はこれに盛り込むのでしょうか。

事務局： なにわ筋線の関係は盛り込みたいと考えています。

小林座長： 次回は冊子の資料になるのでしょうか。

事務局： 次回はまちづくりの方針案として、取りまとめという形でご提示したいと思います。

小林座長： 新しいバージョンができるということです、それを事務局に作っていただいて、
それについてご議論いただき、最終の仕上げとしたいと思います。

では、時間が参りましたので、事務局にお返しします。

3. 閉会

事務局： 本日いただきましたご意見を基に、次回はまちづくりの方針案として資料をお出し
しますので、ご覧いただきたいと思います。

本日は、どうもありがとうございました。

小林座長： ありがとうございました。

以上